

5. 特権的な出会い

1. 劇詩人クローデルの頂点において——『繻子の靴』『内濠十二景』『百扇帖』等
2. 詩人大使の新しい使命の自覚の地平で——エッセイの誕生
3. 20世紀演劇の問題形成の先取りとしてのマラルメの再評価——日本の伝統演劇の理解の仕方の変容——新しい視線

ソルボンヌ大学名誉教授／ソルボンヌ大学院委員長

フィリップ・メナール氏

「マルコ・ポーロ『東方見聞録』のなかの日本のイメージ」

(作成：横山安由美)

《講演要旨》

マルコ・ポーロの『東方見聞録』は、13世紀のヨーロッパの人間が日本について語る、きわめて貴重な証言である。しかしながらマルコ自身はずっと中国に住んでおり、直接日本にきたことがない。いったい彼はどうやって日本の存在を知り、どのような視点からこの国をとらえたのだろうか。

『東方見聞録』については様々な言語による数多くの写本が存在する（明星大学は、1483年頃というきわめて初期のラテン語の刊本を所蔵）。たとえばフランス国立図書館蔵の fr. 2810 写本（1410-1412 頃）は、ジェノヴァの牢獄の中でマルコが物語作者ピザのルスティケッロに書き取らせたとされる中世フランス語版の写本で、その美しい彩色挿絵で知られている。こうした各種の中世写本を比較検討しつつ、さらに13世紀当時の日本や中国の様々な歴史資料と照らし合わせることによって、当時の日本についての実像と虚像を浮かび上がらせてゆく。

とりわけ1274年（文永の役）と1281年（弘安の役）の二度の蒙古襲来についての、西洋人側の描写と、竹崎季長『蒙古襲来絵詞』などの日本側からの描写の比較は興味深い。海上で敵を撃退した「カミカゼ（神風）」は本当にあったのか。それぞれの軍隊の人数が構成はどうだったのか。図像を見て比べてみよう。

実のところ『驚異の書』（『東方見聞録』の原題）は「驚異的事象」をかなり誇張していたようだ。マルコによる脚色は、当時のヨーロッパ人のもつアジアのイメージをよく示している。それと同時に、日本の側の改変もまた明らかになってくるのかもしれない。

参考：『全訳マルコ・ポーロ東方見聞録「驚異の書」fr. 2810 写本』月村辰雄・久保田勝一訳、岩波書店、2002年